

羽角村古屋敷

存在した時期、場所は不明。内藤四郎左衛門正成、村越茂助直吉、松山藤四郎（詳細不明）の名がある。羽角村出身の村越茂助は、3歳の時に父俊吉を亡くし、叔父俊信に育てられた。茂助も俊信とともに家康に仕え、近侍となって駿河国葛谷300石を得る。後に剛勇ぶりが認められて松平信孝が去った三木城（岡崎市三ツ木町）へ入った。1590年家康が関東へ移ると、近江国坂田と武蔵国の入間・多摩3郡内で1000石を受け、後に1万石の領主になる。1600年「上杉景勝討伐」の際に伏見城落城の報が入ると、家康は江戸へ戻るが、茂助は使者として東軍最前線の清洲へ走り、福島正則や池田輝政に家康が直ぐに出馬出来ない理由を説明して緊張を解いた。家康としては豊臣恩顧の武将らが本当に東軍として動いてくれるのか思案していたが、茂助はその心中を福島らに素直に話し、納得して美濃へ進軍したと云う。のちに、家康の老中格として活躍したが、1614年病没。茂助のものといわれている墓は専念寺境内と上羽角町共同墓地に在る。

[内藤正成（1528～1602）]

内藤正成（ないとう まさなり）は、戦国時代の武将。徳川家の家臣。1528（享禄元）年、内藤清長の弟・内藤甚五左衛門忠郷の次男として生まれる。はじめは伯父の清長に仕えたが、やがて松平広忠の家臣となり、その死後は徳川家康に仕えた。15歳の時、織田信秀の侵入の際、矢を射て退けたりした。三河一向一揆の折には、敵対した舅石川氏の両膝を射抜き撃退。三方ヶ原の戦いでは、長男を失いながらも奮戦し、高天神城攻城戦でも、敵方武田軍からもその射力を恐れられたほどの強弓の武功者であった。

1590（天正18）年、家康が関東に移ったとき、三河国幡豆郡700石の知行から、武蔵国埼玉郡栢間村などに5000石を与えられ、栢間陣屋（現在の菖蒲町下栢間の栢間小学校付近。1万坪を超える敷地だった）を構える。病に倒れ、徳川秀忠が医師久志本左京亮常衡を差し向けたが、治療の甲斐なく、1602（慶長7）年に死去。享年75。

[村越直吉（1562～1614）]

村越直吉（むらこし なおよし）は、安土桃山時代の武将で徳川家の家臣。通称は茂助（もすけ）といい、1562（永禄5）年に上羽角村（現在の西尾市上羽角町）に生まれる。3歳で父（村越俊吉）を亡くし、叔父の俊信に育てられた。徳川家康に仕え（老中まで務めた）、駿河葛谷に300石を与えられた。後に剛勇ぶりが認められて松平信孝が去った三木城（岡崎市三ツ木町）へ入った。1590年家康が関東へ移ると、近江国坂田と武蔵国の入間・多摩3郡内で1000石を受け、後に1万石の領主になる。1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いでは東軍の将、福島正則・黒田長政・池田輝政・藤堂高虎らとの間の連絡を務め、岐阜城攻略の命を伝達した。また、1613（慶長18）年、安藤重信と池田利隆の領地である播磨国姫路に赴き、国政を監督するなど、家康の側近として活躍した。1614（慶長19）年1月15日に死去。享年53。その墓と伝えられているものが専念寺と三ノ山（上羽角）共同墓地にあると言われている。専念寺の墓は宝鏡印塔の笠の部分と五重塔の一部を組み合わせた塔で、室町時代のもと言われている。